様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：８３５０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００５４

研究課題名（和文）木食行における作仏の宗教的意義に関する研究－木喰行道・白道の初期作例を通じて

研究課題名（英文）Study on religious significance of the Buddha statue production in the practice asceticism by Mokujiki -Through an early work of Mokujiki Gyodo and Byakudo

研究代表者
近藤　暁子（KONDO, AKIKO）

山梨県立博物館・その他部局等・その他

研究者番号：８０５７４１５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は近世作仏聖の活動の中でも、木喰行道と白道の初期の活動を解明することを目的とした。調査の結果、今まで木喰仏が未確認だった東北地方において新資料を発見することができた。また、2人の作例の区別が明確にされていない北海道内の資料についても、調査の結果、一部資料の作者を明らかにすることができた。さらに新出資料を検証することにより、それが現存最古の作例であると想定され、行道が北海道から作仏を開始したという従来の定説を覆すこととなった。以上のような成果により、今後の木喰研究において新たな局面が開くことができた。

研究成果の概要（英文）：This study was intended that I elucidated an early activity of Mokujiki Gyodo and Byakudo, that priests engraved Buddha statues in the early modern times. As a result of investigation, I was able to discover a new document so far in the Tohoku district where the Buddha statue which Mokujiki Gyodo made was unconfirmed. In addition, about the difference in work of Gyodo and Byakudo missing so far in Hokkaido, I was able to clarify an author about some works, as a result of investigation. Furthermore, by inspecting a new appearance work, it is thought that it is an existence oldest work, I overturned a conventional established theory.

研究分野：日本･東洋美術史

キーワード：木喰　行道　白道

１．研究開始当初の背景

木喰行道（五行、明満ともいう）は江戸時代後期の木食僧で、特に作仏聖として多くの作品を残したことで知られる。しかし作仏を始めた契機などは、充分に検討されているとは言えなかった。

特に、作仏を開始した北海道から東北地方を経て栃木県へ至るまでの間、一体の作例も確認されないことは今まで謎とされてきた。しかし、最近青森県で木喰仏に類似する作例が存在する可能性が出来し、また、北海道内の処女作とされてきた作品も、同行していた弟子白道のものであることが明らかにされた。

以上のような、新出資料の存在によりもたらされる新たな研究視点と、検証されるべきさらなる可能性の存在により、両者の作仏の契機を含む作仏開始初期の様相に関する研究は、次の段階へ進むべき局面にあった。

２．研究の目的

本研究では、行道と白道の初期の作仏の状況を再調査によって明らかにするとともに、木食行の中で作仏が持つ宗教的意義についても言及を試みることを目的とした。

３．研究の方法

（１）初期行道仏および白道仏が確認される地域（北海道、栃木県鹿沼市、新潟県佐渡市など）の現存作例について整理を行う。

（２）（１）の結果、調査が必要とされる仏像について、基本情報の確認・写真撮影（資料写真および赤外線写真）を行い、行道仏か白道仏かを検討する。

（３）行道、白道それぞれの廻国経路を示す文献資料等の検討から、新たな資料が確認される可能性の高い地域を考察する。

（４）（３）で該当する地域で資料の追跡調査を行い、必要に応じて基本情報の確認・写真撮影（資料写真および赤外線写真）等を行う。

４．研究成果

本研究の成果について、実地調査により得られた結果を中心に述べる。

（１）　釈迦如来立像（青森県海傳寺）

①　像の概要

像高２４.８ｃｍ（台座を含む総高２９.８ｃｍ）。台座まで含んだ一木造で、現状で彩色は確認しえない。頭部は螺髪を刻まず、両手は胸前で衲衣の中にこれを納めて印相を明らかにしない。四角張った顔貌に大振りな目鼻を刻み、衣文線の、極めて簡略化されながら両手を覆う先端から右斜めに大きく流れる様子や、裾先を２段に表すところが特徴的である。

また、赤外線撮影等により、像の背面に墨書銘があることが確認された。上方中央には、大きく「（オン〈梵字〉）釈迦如来」の文字、その左右には釈迦を表す真言が記され、さらにその外側左右に「慈眼（目＋示）衆生」「福集海無量」の文字があるように推測されるが判然としない。下方中央には、「作 日本廻国」の文字とともに花押が認められる。年号は見られないものの、これらは初期に制作された木喰仏に記される文言と共通するものである。

②　造形的特色等について

木喰行道は、北海道に渡って後、安永８年（1779）より作仏を始めたと言われてきた。現在確認される最も早い記年銘のある作例は、北海道檜山郡江差町金剛寺の子安地蔵菩薩像である。像高２メートルを超す巨像で、安永８年５月２４日の銘が記される。北海道には道南を中心に２８体（小島梯次氏の御教示による。2015）の像が残されているが、墨書銘に年号が記されていないものもあるため、どれが最初の作かを断じることはできない。しかし、いずれも作仏を始めた頃の素朴さや試行錯誤が際立つ作風であることは共通している。特にやや角張った輪郭、大振りの眉目に鼻、そして上唇の両端を下唇にやや被せるようにする表現、口の周囲を彫り窪めることにより、結果的に頬骨が隆起して見える点、耳輪から耳朶部にかけて外側部分に厚みをもたせて内側をきわめて簡略化する耳の表現等、頭部にみられるいくつかの特徴は、本像と北海道伝存作例に共通する表現形式といえる。

また、左側の袖裾先部に斜め前に流れるような衣文線を刻みこむ様子などは、法然寺（爾志郡乙部町）地蔵菩薩像、薬師寺（爾志郡八雲町）子安地蔵菩薩像に通ずるもので、金剛寺（檜山郡江差町）子安地蔵菩薩像、正覚院（檜山郡江差町）弘法大師像、法蔵寺（爾志郡八雲町）地蔵菩薩像にも共通するところがあるように思われる。さらに言えば、胸元の衲衣の縁をやや盛り上げて造形する点などは、北海道内に混在する弟子白道の作には見られないものであり、行道自身の特色を表しているとも考えられる。

③　伝来等について

本像には、制作年を示す年紀は記されておらず明確な制作時期は不明である。しかし、以上のような造形的特色から、行道が造像活動を始めた初期の作例であるとすることに問題はない。それでは、いつ頃の作と考えられるだろうか。

行道は、像背銘はもとより、『納経帳』や『南無阿弥陀仏国々御宿帳』、『万人講』など自身の行動を伝える複数の資料を残してい

る。そうした資料によれば、本像が伝存する青森県上北郡六戸町周辺を訪れた可能性が高いのは、『納経帳』による次の行程である。
・安永７年５月２９日　南部三戸郡　神宮寺
　（青森県三戸郡 櫛引八幡宮）
・同年６月５日　南部北部田名部　円通禅寺
　（青森県むつ市 恐山）
・同年６月１６日　東羽　滝泉院
　（北海道松前郡江良町か　不詳）
　六戸町は、神宮寺から円通禅寺に至る場所に位置し、移動の途中で立ち寄ったと考えても不自然ではない。この行程によると、行道が北海道に渡るのは恐山円通寺を発って後のことであるから、本像の制作はそれ以前ということになる。一方北海道からの帰途は、記録によればこの地を通っていない。すなわち本像は、行道が北海道に渡る以前に制作された可能性が高い。

④　本像のもつ意義
　本像は総高３０ｃｍ程度の小像であるため、他所から海傳寺に移坐された可能性もある。しかし当寺には他にも作仏聖の手になると思われる像が数体安置されており、角張った頭部に大きな耳、両手を胸前に合わせてそれを衲衣の中に納めて手先を表現しない様子などが本像に通じ、これを手本として模倣した趣も強い。そのため、本像が近世以来当寺に伝来した可能性は高い。
　一方で、安永８年（1779）制作の金剛寺子安地蔵菩薩像と比べれば、本像の仕上がりには手慣れた感があるように思われる。また同年作の竜宝寺地蔵菩薩像、正覚院地蔵菩薩像ならびに弘法大師像と比較すれば作風の相違も感じられ、むしろ、それらより後の制作とされる薬師寺の薬師如来像や子安地蔵菩薩像、安永９年銘の個人蔵観音菩薩像（爾志郡乙部町）などに近しい感覚もある。これらを、小像と巨像、あるいは尊像の相違に帰するのみで良いかどうかも含め、慎重な検討が必要であることも認識しておくべきであろう。
　いずれにせよ、本像は東北地方で初めて確認された木喰仏で、現在確認しうる最も古く、かつ行道の造像活動について従来の説を進展させるものである。したがって木喰研究において、その存在が有する意義は非常に大きいといえる。

（２）　子安地蔵菩薩立像（北海道正隆寺）
①　像の概要
　像高２５.２ｃｍ（台座を含む総高２８.２ｃｍ）。台座まで含んだ一木造で、現状で彩色は無い。頭部は円頂にして、白豪はあらわさない。相貌は、大ぶりな目鼻に、唇は上唇両端が下唇両端にかかるようにあらわされるのが特徴的である。左手を上に、右手を下にして子を抱く。衲衣をまとい、左袖先を前面で三角形に折り返し、裙の裾は２段にあらわす。
　赤外線撮影等により、像の背面に墨書銘があることが推定された。頭部背面には梵字らしき痕跡が、背面中央部には尊名をあらわすかと思われる「地蔵菩薩」と「木」とが部分的に推定された。頭部に梵字を置き、体部背面に尊名を配する様子は、行道の他の作例と通ずるものである。

②　造形的特色等について
　行道の初期作例、すなわち北海道における造形の特色は、海傳寺像の考察において述べたとおりである。それと本像を照らし合わせると、同様の特徴があることがわかる。
　特に相貌の表現などは口唇の部分などに共通点が顕著であり、また、左側の袖裾先部に空気をはらんだような翻りを表現する様は、正覚院弘法大師像に通ずるところがある。

③　伝来等について
　本像は現在、日蓮宗の正隆寺に安置されているが、もともとは同地の青山家に伝わったものという。しかし、それ以前の伝来は不明である。青山家は塩谷（現在の小樽市）の出身であるというが、その先祖は松前家に仕えていたという。１９７６年、１３代当主没後、夫人によって同寺に奉納されたという（小寺平吉『木喰-その蝦夷地の足跡-』学芸書林、1981）。
　造形的特色から行道により初期に制作されたものと思われるが、年紀等は記されていない。文献資料からは行道がこのあたりを訪れたかどうかは不明だが、同行したと思われる弟子白道の自叙伝『木食白導一代記』（寛政８年<1796>）によると「中蝦夷」（積丹半島から石狩川付近までの地域とされる）まで廻国した様子が記されており（近藤暁子「『木食白導一代記』にみる白道の半生」『山梨県立博物館研究紀要 第３集』、2009）、実際にこの地を訪れた可能性は充分にあると考えられる。

④　本像のもつ意義
　本像は、造形的特色から白道作の可能性も指摘されていた。しかし背銘の存在と、造形的特色をあらためて北海道伝存の行道初期作例と比較した結果、行道作である可能性が高いことが明らかとなった。
　小像は後年移入された可能性を考慮しなくてはならない。本像については、弟子である白道の当時の廻国ルートの視点を取り入れることにより、その存在そのものが行道自らがこの地に足を運んだ可能性を提示していると思われる。

（３）　総括
　（１）、（２）の調査結果により、次の２点が明らかとなった。

①　行道が作仏を開始したのは、従来言われていた北海道に渡ってからではなく、それ以

前である可能性が高い。これにより、作仏を開始した契機についても、行道に先立つ著名な作仏聖・円空の作品や、同行していた弟子白道の作品に触発されたことによるというものより、行道自身の宗教的根拠が想定される可能性が高いことが明らかとなった。

② 北海道内の道南地域以外に伝存する作例は、小像であるがために後世の移坐の可能性が高いと思われていた。しかし正隆寺像の検討により、その限りではないこと、また、北海道内の行道の足跡もより広く考えることが可能となった。

以上のような、従来の定説を覆す新資料の発見などの本研究の成果は、今後の木喰研究に新たな局面を開くことにつながると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　２件）

① 近藤暁子 他、株式会社アートワン、「東北地方で初めて発見された木喰仏」『微笑みに込められた祈り　円空・木喰展』図録、2015、122―123

② 近藤暁子 他、竹林舎、「四国堂造立小考―木喰の造像活動における四国堂とその安置仏の意義―」『近世の宗教美術-領域の拡大と新たな価値観の模索-』（仏教美術論集第７巻）、2015、311―323

〔その他〕
山梨県立博物館ホームページ
http://www.museum.pref.yamanashi.jp/2nd_news.htm

６．研究組織

(1)研究代表者
近藤　暁子（KONDO, Akiko）
山梨県立博物館　学芸員
研究者番号：８０５７４１５２